

において紹介したティディム方言の読本 *Lai Sinna Lai Bu, Tan III* の中にも掲載されているが、著者はこの本にも目を通しておられないようである。

ティディム方言が他のクキ・チン諸方言との間にもどのような関係をもっているかという事は、勿論本書の目的ではないにしても、残念ながら明らかにされていない。この書が出版される前に、著者から直接手紙で一読をすすめられた私は、本書が、単に記述研究の段階にのみとどまっているのではなく、クキ・チン語全体の総合的研究を展望できるようなものであってほしいと望んでいた。しかし、音声学を専攻とする著者に対しては無理な期待だったのであろう、結果は記述研究の域を一步も出てはいなかった。

とはいうものの、クキ・チン語の研究者がきわめて少ない今日、本書のような基礎的研究書の出現は、やはり貴重なものといわざるを得ない。この言語の比較研究、史的研究に先立つ基礎的な文献としてすいせんする気持ちに変わりはない。(大野 徹)

U Aung Thaw. *Beikthano Myohaung*. Tekkado Pinnya Padetha Sazaung. Shehaung Thutethana Thana. Rangoon: 1966. xviii+49 p. [ウー・アウントー編：ビシュヌ城跡。大学学術紀要。考古学局]

ビルマは、その中立(鎖国)政策によって外国人の入国を著しく困難ならしめていると同時に、ビルマ国内の学問的現状を世界に公表する事に対しても、かたく門戸を閉じてしまったように見える。ビルマに関心をもちその研究に従事している者にとって、今のような状態は、誠に遺憾であると思わざるを得ない。

さて本書は、当センターの石井米雄助教授が、1966年11月ビルマを訪れた際入手し、持ち帰られた文献の内の1冊である。題名にもあるように、本書はビシュヌ(ビルマ語名ベイタノウ)町遺跡の発掘調査の報告である。ベイタノウは、マグウェー県タウンドウィンダー郡コウコウグッ村の北部にある。プローム南東5マイルの地にあるシュリクシェットラ(ビルマ名タイエーキッターヤ、玄奘の室利差咀羅、義浄の室利察咀羅)およびシュエーボウ県内にあるハリンダーと並んで、ピュー族の三大遺跡の一つに数えられる。

ピュー族は、11世紀以降栄えたビルマ族のパガン王

朝に先立って、ビルマの地に独自の文化をうちたてた民族であるが、10世紀以後いかなる理由によるのか地上から姿を消してしまった。漢籍史料(蛮書)には、南詔に攻撃され捕虜3千人が連れ去られた旨記されているが、ピュー族消滅の理由がそれだけによるとは考えられない。北から南進してきたビルマ族に混血吸収されたのであろうともいわれている(Than Tun)が、その経緯は、やはりビルマ史上最大の謎といってもさしつかえないであろう。

ベイタノウの発掘調査は、1958年から63年にかけて計6回行なわれた。本書の編者ウー・アウントーは考古学局の広報部長であるが、第1次・第2次発掘調査の際の団長でもある。

ベイタノウ城跡は、ほぼ角形をしており(この点、円形のタイエーキッターヤよりは角形のハリンダーに近い)、一辺約2マイルの城壁が、その内部の遺跡と思われる幾つかの小高い丘をとりかこんでいる。

発掘はベイタノウ城跡の全域にわたって行なわれたのではなく、予算の関係で特に重要と思われる25箇所が選ばれ調査された。本書には、その25箇所の各々に関する調査報告があるが、記述順序は、城壁、城門、人家、宗教的儀場、その他というように分類されている。

城壁はすべてレンガ作りで、ほぼ四角な形をしている。ビルマの他の王都のように濠があったかどうかはわからない。城壁の一面には門が3門ずつあったと思われるが、現実には確認されていない。門は木製で、鉄の錠が用いられていたようである。人家には大小数室の間取りがあり、構造は、壁がレンガ、他は木造だったらしく、焼け残った木材があちこちから発見されている。宗教的儀礼に関する建物と思われる場所も見つかっているが、それが仏教的なものなのか、バラモンのものなのかは明らかでない。

最も精細に富んだ記述は、「その他」の章にみられる。この章は、煉瓦、土器、珠数、土像、石器、金属製品、漆喰製品、人骨、獣骨等の項に細分されており、ベイタノウ住民の生活状態をうかがい知る事のできる資料に富んでいる。

特に重要なのは、7個の骨壺が出土している事である。骨壺は、ピュー族文化を示す一つの特徴だといってもよい。ピュー族には、荼毘にふした骨や灰を、石または土製の壺におさめて埋葬する習慣があり、この習俗は、その後ビルマ国内のいかなる民族にも伝承さ

れていないところから、骨壺の存在は、ベイトノウの住民がタイェーキッターと何らかの関連性をもっていた事を推測せしめる。ベイトノウ出土の骨壺はいずれも土製だが、無彩色で釉は施されていない。

土器には骨壺のほかに灯油皿、土瓶、鍋、水差し等があり、通常その表面に人、魚、貝、蛇、宝珠等の紋様がぎざまれている。その外、ガルータと思われる粘土製の上半身像が一体と、犬、蛙、巻貝等の土像および土製の弩の鏃、耳飾り、煙管等も発掘されている。

珠数は大半が土製だが、中に若干石造のものもみつまっている。石材には、門の両脇に建てられた守護神2体と、シハ教徒の崇拜対象たるリングと思われるもの、ビシュヌ神の所持品らしき石板等が出土している。

金属製品には鉄（釘、門、蝶番、鏃）、銀（宝珠、旭日、月、後光を刻印したコイン、杯）、金（杯、棒）、鉛（楯）、銅（獅子像、白鳥像、耳飾り、指環、腕環、やかん、棒）、真鍮（鈴）等が発見されている。

人骨は、頭蓋骨をはじめ全身の骨格がそろったもの1体と、散在していた部分的な骨が発掘されている。獣骨は道具として使われたらしく、簪、ペン先、皿等があり、またその外に鹿の角と貝殻が数片発見されている。

以上のような発掘調査に基づき、調査団はベイトノウ城跡について、次のような結論を下している。

- (1) ピュー族固有の骨壺埋葬制やピュー・コインの存在等を考えると、ベイトノウはピュー族の居城であった。
- (2) 出土した焼残りの木材をラジオ・カーボン法で測定した結果、ベイトノウの繁栄期は1・2世紀から4・5世紀の間と推測される。
- (3) タイェーキッターや、ハリンヂーで多数発見されているピュー文字・ピュー語の碑文（Chas. Duroiselle: Robert Shafer）や、仏菩薩の像（U Mya）が、ベイトノウからは1体も出土していない。従って、ベイトノウの住民はまだ文字をもっていなかった。また宗教的にも、仏教は未だ信仰されていなかった。同時にこれらの点から、ベイトノウが時代的にはタイェーキッターよりも古い事が裏づけられる。
- (4) 家屋、城門等建造物にはいずれも著しい焼け跡がみられ、この町が火災で焼失した事は疑いない。恐らく4・5世紀頃に外敵の侵入攻撃をうけ焼き払わ

れたものと思われる。

以上、本書によって我々はベイトノウ遺跡の発掘調査の成果をうかがい知る事ができるが、疑問が全くないわけではない。例えば、旧唐書、新唐書、蛮書、文献通考、唐会要、太平御覧、太平寰宇記等の漢籍史料に表われる「驃」国の記述とどのような関連性をもつのか、あるいはもたないのか。ベイトノウは、タイェーキッターの創始者であるハリ・ビクラマの兄ジャヤ・チャンドラ・バルマンによって建設されたといわれる（Than Tun）が、ハリ・ビクラマは西紀695年に死んでおり（C.O. Blagden）、ベイトノウの滅亡の時期4～5世紀頃との差をどう解釈するのか等々。

今後、全城域にわたる発掘調査が遂行される事を切望すると共に、ピューに関する他の文献、資料との関連性も追求してもらいたいと思う。

ともあれ、本書が、ビルマ政府の古代史研究に対する考えを知る上にも、またビルマの学問的水準の現状を知る手がかりとしても、きわめて有益な資料である事は、確かである。（大野 徹）

Manning Nash. *The Golden Road to Modernity, Village Life in Contemporary Burma*. New York: John Wiley & Sons, Inc., 1965. viii + 333 p.

ビルマについて書かれた本は少なくないが、これまでは例外なしに政治・経済・歴史あるいは言語学の分野のものが多かった。本書のような村落調査のモノグラフは、絶えて久しく現われなかった。従って、まずなによりも、本書が稀少価値をもつ点を強調しておこう。その点で、本書の刊行は、無条件に歓迎されねばならない。本書は内容的にもすぐれている。単に調査内容がすぐれているだけでなく、ことのよしあしは別として、社会人類学の一つの新しいあり方を示しており、興味深いものがある。とくに人類学プロパー以外の社会学者が村落調査をおこなううえで参考になる点を多分に含んでいる。

本書のもとになった調査は、1959年から1960年にかけての1年間、マンダレー周辺の二つの村落でおこなわれた。一つはマンダレー西方約23マイルにあるNondwinであり、もう一つは、マンダレー南方7マイルのYadawである。この二つの村は、一方が a mixed dry crop farming community であるのに